設楽発掘通信

No.7
平成26年
12月1日号

西地・東地遺跡の発掘調査もいよいよ終盤へ

七月から始めました西地・東地遺跡（大名倉所在）の発掘調査は、三つの調査区に分けて実施していますが、ようやくB区とC区の調査を終えることができ、現在は最後の調査区となるA区で作業を進めています。西地・東地遺跡のB区とC区では、中世から江戸時代までの屋敷に関わる遺構や遺物が確認され、縄文時代の土器や石器がたくさん出土しています。現在調査を進めているA区では、範囲確認調査では谷地形があることが分かっており、その結果からみて多くの遺物が出土する見込みです。今後の調査成果が期待されます。

さて、すでに現地調査が終了した万瀬遺跡（川向所在）ですが、最終的な整地作業や資材の撤去作業を終え、現在は設楽詰所にて整理作業を進めています。現地で行う整理作業には、遺物の洗浄・収納作業と図面や写真などの調査記録の整理作業の2種類があります。

遺物の洗浄作業は土で汚れた出土遺物をきれいに水で洗う仕事ですが、中には壊れやすい土器や風化した石器などもあり、力を入れ過ぎて遺物を傷めないように注意する必要があります。また、遺物は出土した場所も重要な情報となるので、収納する時も出土した地点や層ごとにビニール袋に分けて整理します。

一方、調査記録の整理作業は、現地で記録した生の情報を第三者がみても分かるようにする仕事です。写真の整理は、写真に通し番号を付け、何をどの方向から撮影したかなどを記入したリストを作成します。また、図面の整理は、現地で測量した位置情報を具体的な図面の形に編集し直す作業で、これは大変手間のかかる仕事です。こうした作業は、調査員や測量技師の記憶が鮮明なうちに行わないと、分からなくなったり間違えたりすることがあるので、設楽詰所で速やかに終えることが望ましいのです。

このような整理作業を全て行うことで、本当の意味で現地での発掘調査が終了するのです。そして、近い将来に調査報告書を作成することになりますが、こうした多くの作業を行うことにより、発掘調査成果から具体的な地域の歴史像を明らかにすることになるのです。

（愛知県埋蔵文化財センター　鈴木正貴）

西地・東地遺跡B区調査について

西地・東地遺跡B区（大名倉所在）では江戸時代遺構の空撮の後、補足作業を行っています。その中には近世の炉跡（写真1）と土坑が複数確認出来ました。

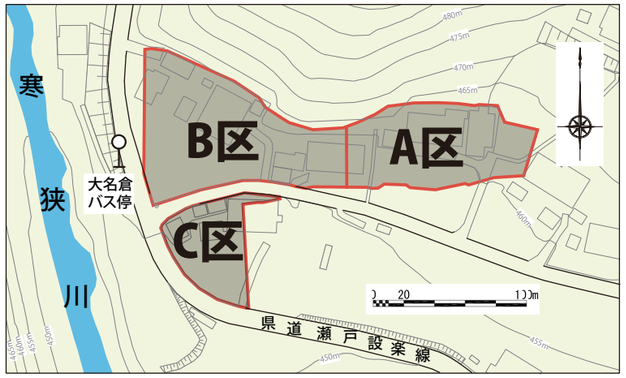
炉跡はそのほとんどが後世の掘削などにより撹拌されていましたが、その中の1基は被熱した土が厚く残存しており、中央がくぼんで周囲が盛り上がっている様子がはっきりと分かりました。また、まとまって確認出来ることから屋内ではなく野外に築かれた野鍛冶の可能性も考えられます。

また、土坑墓はB区のほぼ中央東で3基確認出来ました。これらの遺構からはそれぞれ頭蓋骨や手足の骨などが検出されています（写真2、3）。副葬品にキセルや火打石があることから埋葬時期は不明ですが、江戸時代に埋葬されたと考えられます。頭蓋骨は3基の土坑墓全てから出土し、歯なども確認されました。現時点では埋葬された人の年齢や性別は不明ですが、今後の調査や整理作業などで判明するかもしれません。

（ナカシャクリエイテブ株式会社　後藤太一）

写真２　出土人骨

写真１　炉跡



調査区位置図

写真３　人骨検出風景

西地・東地遺跡C区調査について

西地・東地遺跡では10月の終わりごろからB区の南側に位置するC区の調査も本格的に開始いたしました。C区は、B区西側とA区から流れる二本の谷がちょうど合流する場所と考えられ、大きな川原石がゴロゴロと頭を出しています（写真1）。C区では、12月に体験発掘を行った際に、多くの遺物が出土しましたが、縄文時代から中世・近世まで様々な時代の遺物が混ざって出土する状況が確認されています。長年にわたり、土砂崩れなどの上流からの土の移動に伴って、遺物も一緒に運ばれてきたのでしょう。

目立った遺物としては、縄文時代の大型石棒（男性器をかたどった棒状の石　写真2）、耳飾り（耳たぶに穴をあけてはめ込む環状の耳飾り　写真3）が出土しています。どちらも非常に珍しい遺物ですが、同じ堆積層から近世の陶器なども出土しており、やはり本来の場所からは移動している可能性が高いです。しかし、耳飾りと同時期の巻貝条痕（土器の表面に巻貝を押し当て文様をつける）が施された土器がまとまって出土している地点もあり、この周辺で縄文時代後期～晩期に人々が活動していたことは間違いないでしょう。

（ナカシャクリエイテブ株式会社　廣瀬正嗣）

豊田市丸根遺跡出土耳飾り（径約3cm）
【豊田市教育委員会提供】

写真１　C区全景（南から）

写真３　耳飾り

写真２　大型石棒

縄文時代の編み組み技術

カゴやスダレなどの編みものあるいは組みもの（編組製品）は、民俗資料としてまたは現代でもよく見られます。このような編組製品を作る技術は、縄文時代にも存在していました。

写真上は、万瀬遺跡から出土した縄文土器の底の部分です。底を下からみると、凹凸が確認できます。これは、当時使われていた編組製品の圧痕です。土器は直径八センチほどで、痕跡は底部全体に広がっています。この編組製品は、幅四ミリほどの太さのヒゴ状にした植物質の茎で組まれています。素材の詳細は不明ですが、ササ類などであったかもしれません。組み方を観察すると、経材に比べ緯材がわずかに細いござ目状で、二本飛び越えて、二本くぐらせ、一段ずつ送っています。写真下は、この痕跡に粘土を当てて、型取りを行ったものです。土器に残された圧痕とは凹凸が反転しますので、もとの編組製品の状態に近いものが観察できます。縦横への組み方の広がりが均一であり、アンペラ状の敷物であった可能性があります。

当時、縄文土器を製作するとき、土器の下に敷物を当てることがしばしばありました。敷物には編組製品のほかに、木の葉が使われることもありました。土器の底につく編組製品の圧痕は、縄文時代中期から晩期までは広く認められますが、弥生時代以降は極めて少なくなります。万瀬遺跡の縄文土器の主体である、縄文時代後期中葉（今から三千五百年前）の土器には編組製品の圧痕が多く、痕跡も深く鮮明になるようです。

このように、縄文土器にはいろいろな痕跡が残されていることがあります。元資料が土の中では残りにくい有機質のものである場合、このような圧痕資料は実資料に匹敵する有効な証拠となるのです。（愛知県埋蔵文化財センター　川添和暁）

↑
左の写真は、上の土器底部を下から見たものです。

万瀬遺跡出土縄文土器の底部

万瀬遺跡出土縄文土器の底部の様子（粘土による型取り）

設楽発掘通信 No.7
平成26年12月1日号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ケ須町野方802の24
電話 (0567)67-4161【管理課】 4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　ナカシャクリエイテブ 株式会社